

令和7年度西播磨圏域自立支援協議会 合同部会 記録

日 時：令和7年10月24日（金）14：00～16：15

場 所：たつの市役所 新館4階 大会議室兼災害対策本部

1 開会

配布資料の確認後、鈴置コーディネーターより今回の会議の目的について説明。

2 事例紹介・意見交換

未就学児・小学生・中学生の事例を紹介後、事例ごとに意見交換（その後、各グループで出た意見について発表）を実施。

① 未就学児の事例

（グループ発表）

- ・3班：4歳の時点で相談に繋がり、良い具合に支援が繋がりにつつある事例。

そういった支援をすり抜けて、小学校や中学校にあがっている方が増えてきており、その方をどのように支援していくかが課題。

- ・7班：2歳7か月で療育に繋がるということは、2歳の段階でASDと診断されており、病院にかかったり保育園でも問題行動があったりと、お母さんはたくさん傷ついてたくさん悩んで悲しい思いをしながら支援に繋がられたのかなと思う。我々は子どもの発達の方に目が向いてしまうが、お母さんのしんどさや療育に頑張ってくれてくれたお母さんの思いにしっかり寄り添い、発達とあわせてお母さんの困り感を事業所で話ができることが必要なのでは、という意見があった。

また、太子町では、いろいろな機関が繋がってそれぞれの子どもの寄り添った支援を共通に理解して行えているという話があり、羨ましいと感じた。

② 小学生の事例

（グループ発表）

- ・4班：お父さんにどのように理解してもらおうかについて、病院の先生など立場のある人から客観的に見てもらい、その診断結果を見てもらって納得してもらおうという意見や、親族を交えて話し合う、お父さんが療育に理解を示していない理由をお父さんに直接話を聞いてみる必要がある、という意見があった。

- ・5班：同じような体験があるかということについて話し合った。学校は関係性が崩れると取り返しにくいので、事業所などと繋がっているのであれば信頼関係を築けたところから言ってもらおうのが良い、という意見があった。

また、事業所であってもご家族の希望で途切れてしまう方がおり、そういった方の情報を追いかけることは難しい、という意見もあった。

お父さんにも理解してもらうためには、理解している人（お母さんとか）から話してもらい、「本人がどう思っているのか、児童の気持ちになって考えてみてはどうか」ということを保護者にも働きかけながら理解を深めていくことが必要。お父さんが理解できないのであれば、「お父さん、今はもう昔とは違うんですよ」とご家族から言ってもらいなども重要。

また、太子町ではいろんな機関が密にやっており、何か問題があったときにすぐ対応できる関係性があるので、日頃からそういった関係性をつくっておくことも大事。

- ・1班：小さい頃からいろんな機関と繋がっていることが大事、早く繋がったほうが良いという意見があった。また、お父さんがなぜ前向きじゃないかの理由を聞いてからアプローチしていく方が良い、という意見もあった。

この事例におけるキーパーソンは母だが、最後の段階で誰も本人と繋がっていないように思える。ここで大事になってくるのは学校。学校がお父さんとコミュニケーションを取ることが必要。

療育を一度中断してしまうとまた繋がるのは大変なため、家族の判断で勝手に中断するのではなく、他の機関等も交えて話し合いをする必要がある。

③ 中学生の事例

（グループ発表）

- ・2班：この事例は比較的ちゃんと繋がった事例。

発達検査などを誰がどのタイミングで言うのかを考えないといけない。

学校は時間の猶予の問題やたくさん生徒を抱えているため関わり方が難しいという問題がある。事業所であれば、いろんな関わりの中で保護者の方からの紹介や事業所間での紹介・やりとり等で、ご兄弟も含めてつながったという話があった。

中学校の事例だったので、進路やその先を見据えながら、本人のご希望を最大限に尊重し、寄り添っていくことが大事。

- ・6班：これまでお母さん自身も不安や葛藤が多々あったと思う。そこをしっかりと話を聞きながらアプローチする必要がある。

また、小学校に入ってから、お子さんにも常にしんどさがあったと思う。学校での状況については学校の先生から伝えたり、また、違う立場としてスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーにも協力いただきながら、病院になんらかのアプローチができるのではないかと。

中学校を卒業してからの進路のことについて、発達検査の結果を見ながら、その子の強みや興味関心を活かして、最適な進路についていろんな関係者や支援者が集まってその子のしんどさも含めて共有して支援していく必要がある。中学校になると、しんどい面がたくさんでてくるかと思うので、誰かに相談できることが大事で、その子のしんどさを支援級や通級等で個

別にサポートできる方法があれば良いなという意見もあった。

- 8班：小学4年生で相談があったということで、ご本人も低学年の頃から勉強に対する難しさ等を感じていたのではないかと。

お母さんも急に言われても驚くかと思うので、まずは先生間で情報共有できたら良いのでは。

また、お母さん方に向けて、低学年の段階で「発達検査というものがあるんだ」「障害福祉サービスにはこういうものがあるんだ」ということを、障害の有無に関係なく全員に知ってもらえたら良いのでは、という意見があった。

3 各市町の教育と福祉の取組状況について

- 相生市：就学前のお子さんについては、入学前の相談として、保育園の先生や保護者から相談があった際には、保健師や基幹相談支援センターが訪問して進路についてお話し、情報共有している。市外の保育所・幼稚園に通われている方については支援ができていないのが課題だが、病院からの依頼で保健師が動いたり、保育所も協力的なため話を伺ったりしている。

小学校については協議会を通して、先生方に「現在の障害児の福祉サービスがどうなっているのか」「保育所等訪問とは何なのか」「放課後等デイサービスは具体的に何しているのか」等についてお伝えする機会を設けている。今年度は、「通級や支援級のこと」「相生市がもっている教育や療育に関わる支援がどういうものなのか」「何が違うのか」について教育委員会の先生に説明してもらった。

今後も引き続き、まずは基本的なことを学校の先生に理解してもらうとともに、事業所も分かっているようで分かっていない「福祉支援が必要なお子さんに対する学校の動き」等について共通認識にしていこうというのが実態。

- たつの市：基幹相談支援センターは地域包括支援課の中にあり、健康課や児童福祉課が包括的に子どもの支援をしているため、基幹相談支援センターとして直接子どもの支援に携わる機会は少ない。しかし、祖母がおられる、父の就労支援が必要などの複合課題については、学校教育課や幼児教育課など学校関係の課や、児童福祉課、健康課に集まってもらい、「それぞれの支援をどういうふうにしていくか」「本人の支援はどこがどんなふうに関わって情報を把握するか」という支援会議を基幹相談支援センターが主体となって庁内連携という形で定期的に行っており、それに対するモニタリングをして関わっているというのが実状。今回、会議に参加し、行政・福祉・教育・療育のそれぞれの立場でかなりしっかり支援をいただいていることを感じた。地域によって繋がりの濃い・薄いはあるにしても、支援を繋げていくことが大事な役割だと思っているので、子ども家庭センターもあるが、基幹相談支援センターも協力をしながら、一緒に繋がりをつくっ

ていきたいなと思っている。

- 赤穂市：数年前から毎年度初めに、任意にはなるが、福祉サービスの利用をしているお子さんについては、保護者から学校にどこの事業所を利用しているかをお知らせしてもらうようにしている。情報共有ができれば、必要に応じてお子さんのための連携が可能。それが実際にうまく機能した例はまだないが、赤穂市の中では個別支援を通じてその都度連携ができています。保護者から「学校の先生が子どものことで困っているらしい」という相談を受けた場合、「一緒に話を聞こうか」「みんなで考えようか」というような機会をつくっていくことも比較的できていると評価している。ケースによっては医療が入ってくるお子さんもいらっしゃるのでも、そういったところもケースを通じて積み重ねていき、それがきっちりとした形になっていけば良いなと思っているので、そこは今後の課題として自立支援協議会等で取り組んでいけたらと思う。
- 宍粟市：未就学児については、保健福祉課や包括支援課の保健師が関わり、教育委員会の先生とも連携をとりながら5歳児健診や就学時健診を行っている。サポートファイルを保健師や所属の園の先生方が作成してくださるので、それを持って病院に相談に行かれた方や診療を受けられた方は就学するための支援をしている。就学後の方については、教育委員会がメインだが、基幹相談支援センターとしても対応させていただく。個別の相談があれば保護者の同意を得て教育委員会に繋がさせていただくことも。また、逆のパターンとして、教育委員会から福祉サービスということでこちらの方にご相談いただくこともある。
- 太子町：縦と横の連携としてトライアングル会議が定着しており、事業所にもご参加いただいている。定期的なモニタリングをされるときに、保護者のみなさんと学校の様子などについてミーティングを行っている。定期的に行うことで、起こりうる課題に対応するのが、SSW や心理士や行政を含めてやることができていると思う。続けられているのは、事業所さんなど、人に恵まれているということがとても大きく、それによってチームができた。また、役割分担もできている。チームで考えていることは保護者にどれだけ共感できるか。保護者はなかなか褒められておらず、「お母さん、頑張ったなあ」と声をかけると涙を流す人も。共感を大事にしながら、取り組んでいければ。完璧な答えではないが、コンパクトな町だからこそのことではある。今日参加されている小学校には、福祉学級が11クラスあり、78名在籍。1つの学校があると思って良いレベルで、課題を乗り越えるには学校だけではできなくなっている部分もあるため、共に歩んでいる状況。
- 上郡町：令和6年4月から子ども家庭センターを立ち上げた。療育や虐待等の相談があるが、いろんなところで共通しているのは、お子さんが小さい時から早めの対応すること、かつ、関係機関を交えて情報共有しながらみんなで支えていくことが最も大事。そういう点を含めて子ども家庭センターの立

ち上げに至り、母子保健の部門や療育の部門、児童福祉の部門が1つの建物の同じ課に入っているので、連携がとれている。今のところそういった形で、早めの対応ができると思っている。今後もより一層良い方向に持っていければと思っている。

- 佐用町：4月当初に計画を全て練っているが、これまで福祉と学校の関係が出来きっていなかった。2年程前からトライアングルプロジェクト会議を開始し、まずは学校と事業所の顔の見える関係づくりをしている。次の課題としては、学校の個別の子どもに関しての情報共有や、目同じところを見るという部分が出来きっていないことがある。個別のトライアングルプロジェクト会議が各校で出来れば良いと考えている。年に2回はコーディネーターの会も行い、保・小・中・高の先生と事業所、福祉、行政が一堂に会し、コーディネーターの研修を受けているため、そういったところから交流・連携をしている状況。

4 総評（宮崎会長）

学校・事業所・市町の方に集まっただけでとても良かった。一番良かったのは休憩時間。会場全体が大盛り上がりしており、そういった繋がりが連携にとって大事。連携となると、あがってくる情報はもっぱら課題で、それをどういうふうに取り組んでいくか、という話になる。そもそも、なぜ子どもに問題を感じるのかというと、その子供に願いを託しているから。問題の裏には常に願いがある。連携をして何をやっていきたいか考えると、子ども本人が抱えている願いもあるし、周囲の大人が抱えている願いもある。その願いの裏側にある問題ばかり見ると、問題なんて切り口によっていくらでも作り出されてしまうため、それをどれだけお互いに話し合っ、願いをそろえていくか、ということが連携のポイントになる。ただ、今時子どもの育ちも多様化で正解がないという時代が来ており、正解がないのは良いことだが、逆に言うと正解がないため、自分がやっていることや言っていることに自信を持ちづらいという面もある。そのため、各現場でやっていることが、身内でやっているときは楽しくやれていても、いろんな職種が入ってきた途端に「これってこれで大丈夫なのかなあ？」「これで本当に良いのかなあ？」という思いを抱きやすいというのも、正解がない弱点。そうなる、いかに語り合うかということが重要になるうえ、保護者や子ども、支援者は自分の要望は語っても願いは語りづらく、胸を張って言いづらいところがあって、考えているとどうしたら良いのか分からなくなって、結局問題に焦点が当たってしまい、問題解決一辺倒になる。そういう風にならないようにしていくために、やっぱりいろんな人と話し合うのが重要なんだと思う。その子に対して各々が感じている願いごとを語り合っ言葉にってもらって、語り合っただくことで、子どもを中心として語っていく場がみんなの自信をつけていく場にもなり、連携になるのかなと思う。そこには子ども本人や保護者もいる。こういった場が各市町でも広がってくれることを私自身の願いとして思っているの、ぜひまたそういう機会を設けていただけたら。

5 閉会

閉会挨拶（事務局）：教育と福祉の関わる機会を設けたいと思い、今回初めて学校の先生もお呼びした。たくさんの方にお越しいただけて、充実した会議になったと感じている。

（その後、資料「たつの市 障害福祉サービス等のしおり」に基づいて説明。）

【当日の様子】

